

子ども学科教員の推薦図書紹介2017

専任教員たちの推薦図書をご紹介します。

安藤正樹	まどみちお『100歳詩集 逃げの一手』小学館、2009年 誰もが知っている童謡「ぞうさん」「やぎさんゆうびん」など、たくさんの童謡・詩集を発表。1994年85歳のとき日本人初の『国際アンデルセン賞』を受賞。100歳を超えても創作活動を継続中。谷川俊太郎とまどみちおの、子どものための詩集はぜひ一読を！
	河合隼雄『子どもと学校』岩波新書、1992年 臨床心理学者として日本の教育や文化等に多大な功績を残した著者の考え方、子どもとの接し方、子どもの心のとらえ方など、保育・教育に携わるたくさんの人に読んでもらいたい一冊！
金井徹	ルソー（今野一雄訳）『エミール』（上・中・下）岩波書店、1962年 「子どもの発見」、自然主義など、教育を学ぶ際には欠くことできない重要な論点を提示したルソー自らによる教育論。自分が受けてきた教育、あるいは、自分が理想とする教育と対比させながら読むのも良いでしょう。
	見田宗介『現代社会の理論-情報化・消費化社会の現在と未来-』岩波新書、1996年 消費社会・情報化社会をキーワードに、現代社会の光と闇を分析し、望ましい社会のあり方を構想しようとするものです。現代の社会問題を捉えるひとつの視点を提供してくれます。やや難解ですが、飛ばし読みでも十分価値ある一冊と思います。
	吉見俊哉『大学とは何か』岩波新書、2011年 歴史を踏まえつつ今日の状況に則して、「大学」の捉え方そのものを再定義しようという一冊。学生として、これから通おうとしている、あるいは、現在通っている「大学」とは何か、そこで何をすべきなのかについて深く考えさせてくれます。
粉川妙子	齋藤喜博『授業入門』国土社、1990年 文化の再創造としての授業に挑みつつける教師の姿を生き生きと描いています。“教育とは何ぞや、教えるとは…” 喜博先生の子どもたちに寄り添った教育実践が綴られています。教育に対する考え方をゆさぶる一冊です。
	近藤 卓『いのちの教育の理論と実践』金子書房、2007年 臨床心理士でもある近藤先生は、いのちの教育の必要性と基本的考え方について語っています。子どもたちにいのちの大切さを教えるにはどうすればよいのか…。深く考えさせてくれる本です。
	ライアン・ホワイト『エイズと闘った少年の記録』ポプラ社、1992年 一度は見聞きしている本ではないでしょうか。血友病の薬からエイズに感染してしまった少年。病氣と闘い、差別や偏見と闘いながら、力強く生きた彼の姿がいきいきと描かれています。“いのちってなに、生きるってなに”と私たちにメッセージを投げかけている一冊です。
小松秀茂	三浦綾子『銃口（上・下）』小学館文庫、1998年 戦争について、平和について、人間について、愛について、教育について、深く考えさせてくれる小説です。キリスト者・三浦綾子の真骨頂、最高傑作と言ってもよいと思います。激動の昭和を生き抜く主人公・北森竜太の人生に寄り添いながら、教師のあるべき姿を考える、というのも一つの読み方だと思います。
佐藤淳一	合田道人『童謡の謎1・2・3』祥伝社 2002年 かごめかごめ、花一匁、赤い靴、赤鼻のトナカイ、ロンドン橋など、幼い頃、誰もが歌ったことのある懐かしく思い出にあふれた数々の童謡の中に隠された意外な物語が紹介されています。
杉山弘子	松谷みよ子『ちいさいモモちゃん』講談社、1964年 ほんわかした世界の中に、0歳から3歳の時期のリアルな子どもの姿が見えてきます。モモちゃんとアカネちゃんの本のシリーズの1冊目。
	とよたかずひこ『バルボンさんとさくらさん』アリス館、1999年 動物たちを通して描かれる子どもと保育者、子どもと親、夫婦の関係に心が和む絵本です。「ワニのバルボン」シリーズの1冊。
	長谷川摂子作、ふりやなな画『めつきらもつきら どおんどん』福音館書店、1985年 友だちとあそぶことの嬉しさやあそんでいる時の心の躍動が伝わってくるような絵本です。

相馬亮	上野行一『五感をひらく10のレッスン〜大人が愉しむアート鑑賞』美術出版社、2014年、972円 「美術館でつい解説から読んでしまう」「作品の見方には1つの正解があると思っている」そんなあなたにうってつけの1冊です。この本を読んで、より作品に近づける方法を知ってください。
	レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』新潮社、1996年、1512円 美しいもの、未知なもの、神秘的なものに目を見はる感性[センス・オブ・ワンダー]を育むために、子どもと一緒に自然を探索し、発見の喜びに胸をときめかせる。誰もが幼少期にはもっていたそんな素晴らしい感性をもう一度思い出させてくれる1冊です。
	小松成美『和を継ぐものたち』小学館、2010年、669円 日本の伝統文化が存続の大きな危機に瀕している現在、日本古来の高度な技術を継承し続ける職人たちの一途な生き方を記した1冊。棋士、三味線奏者、能楽師、書道家など、総勢22人の「和を継ぐものたち」の言葉から、日本という「誇り」を感じてください。
田中和夫	大岡信『折々のうた』(岩波新書)、1980年3月。 正・続・一・二……と続いていますが、まずは(正篇)。古代から近代の歌が、感性豊かな筆致で二百字程度に簡潔に記されています。折に触れて、どこからでも読むことができます。
	広中平祐『生きること 学ぶこと』(集英社文庫)1984年3月。 世界的な数学者が自らの創造的営みを語った人生論・学問論。嫉妬と言えば、女性のそれがすぐ浮かびますが、男性の学問研究の上での嫉妬心がどれだけ創造の妨げになるかといった話(「ライバル意識とあきらめの技術」)、身につまされています。
	桑原武夫『論語』(ちくま文庫)1985年12月。 孔子の言行がまとめられている中国の古典『論語』。それをフランス文学者桑原武夫が『論語』の新しい魅力を、原文に添いつつ縦横に語っている。
田村嘉勝	開一夫『赤ちゃんの不思議』岩波新書、2011年、720円 いわゆる(赤ちゃん学)に関する文献は多くある。研究分野によって当然、しかるべき分野に対象をあてて説得力を持たせている。著者は脳科学・認知科学者であるという。赤ちゃんの驚異的な認知力は何のレベルなのかなど、新たな視角による著作である。
	津守真『子どもの世界をどうみるか』NHKブックス、2005年、870円 「子どものための保育」とは「誰による誰のための保育」なのか。一見わかりきったような文脈。誰もが子どもを知ろうと、例えば、彼らの描画に注目したりする。あえて言うなら臨床児童心理学か、いやもっと平易なタームなら子どもと生活してわかることが。
	鳥飼玖美子『危うし！小学校英語』文春新書、2006年、730円 著者は以前、ラジオ講座で英会話を担当されていた。今春から小学校5、6年生に週一回英語の授業が。指導者は、できれば英語を母国語とする外国人がいいという。しかし、指導する内容と言え地域格差がある。その指導内容にメスを入れたのが本書である。小学校の英語のありようをわかりやすく解説している。
土田定克	岡田武彦『ヒトは獣で人となる』登龍館、平成13年、1300円 子どもが真の自由を得るための賢い方法とは何でしょうか。内なる精神を深く養う(しまり・つなぎ・けじめ)を通して「子どもの精神的支柱の確立」を促す教育を考えましょう。
	かとうようこ 作・絵『バイオリン弾き』星雲社、2000年、1600円 フェヒナーの法則によると、人間は小さな音の変化は敏感に感じ、大きな音の変化に対しては鈍感に感じるようです。子どもの心を守る繊細な色と音の世界がここに 있습니다。
	坂村真民詩集『念ずれば花ひらく』サンマーク出版、1999年、1000円 母が語った言葉が詩人の心に一生響いてこの本の題名になりました。だんごより花を見つめた詩人の言葉に、保育で大切な力強いものを聞き届けて下さい。「鳥は飛ばねばならぬ 人は生きねばならぬ・・・」。
天間環	柳治男『＜学級＞の歴史学』講談社・選書・メチエ 2007年、1500円 いじめ、不登校問題等、学級を舞台にして起こる様々な問題を根本から考えるために、本書を手掛かりにしながら、「学級とはどのような場」であるのかを、もう一度考え直してみると何か良いアイディアが生まれるかもしれません。
	コメニウス(井ノ口淳三訳)『世界図絵』平凡社ライブラリー 2010年、1359円 本書は、今から約350年以上も前に世に出されました。それまでの言語教授法から新しい教授法確立のために「絵入りの教科書」として、子どもたちの組織的教育のために用いられました。驚きです。
	デューイ(松野安男訳)『民主主義と教育』岩波文庫 2007年、上(700円)下(660円) 学生のとき「教育とは、経験の意味を増加させ、その後の経験の進路を方向づける能力を高めるように経験を改造ないし再組織することである」(第6章二節)という件から、教育についての専門的定義を学びました。皆さんも、是非この大著に挑戦してみましょう。

東義也	大塚久雄『生活の貧しさと心の貧しさ』みすず書房、1978年 生活が貧しければ心も貧しいのか。しかし、生活が豊かなのに心の貧しい人もいるし、生活は貧しいのに心の豊かな人もいる。価値観の転換を迫られ物事を深く考えさせられる講演や対談の記録。
	津守真『保育の一日とその周辺』フレーベル館、1989年 保育者の必読書。大学院時代に苦しみながら、でも、喜びを感じながら取り組んだ津守先生の代表作。子ども学科の学生たちともぜひ一緒に読んで感動したい本です。
	元永定正『ころころころ』福音館書店、1982年 1、2分で読めてしまう絵本。いろだまがいろんな道をころころと旅をします。単純だけど人生を感じてしまうのは私だけでしょか。これをもっと上手に読めるようにになりたいなあ。
前田有秀	波多野誼余夫、稲垣佳世子著『無気力の心理学』中公新書、1981年 「イヌも無力感におちいる」という出だして始まる本書には、乳幼児期から老年期まで人がやりがいをもって生きることが、心理学的観点からわかりやすく書かれています。将来人とかかわる仕事をしたい人には大変参考になる知見が得られると思います。
	エリック・カール作・もりひさし訳『はらぺこあおむし』偕成社、1989年 独特の色彩とタッチで描かれた絵本。食いしん坊でちっぽけなあおむしは、くだものやおかしなどを次々と食べ、おおきなサナギになって、最後にはきれいなちょうちよに変身します。見ている子どもたちもちょうちよと一緒に羽ばたいてしまうほど人気の絵本です。
	あきやまただし作・絵『へんしんトンネル』金の星社、2002年 保育園の子どもたちが大好きなことばあそびの絵本です。読み手の演じ方によって、絵本の持つ魅力がさらに引き出される作品です。他にも「へんしんコンサート」「へんしんおぼけ」などシリーズ化されています。大人も思わずブツと笑ってしまう絵本です。
安田勉	シルヴァスタイン(倉橋由美子訳)『ぼくを探しに』講談社、2004年 単純な線で描かれた何ともユニークな欠落したかけらの絵。欠落した足りないところを探し求めて旅に出る。足りないところは見つかるのだろうか。そして見つかったと思ったら？
	シルヴァスタイン(倉橋由美子訳)『ビッグ・オーとの出会い 続ぼくを探しに』講談社、2004年 「ぼくを探しに」の続篇だが何かがちよっと違う。そしてまた欠落したかけらがまた旅に出る。欠落しているところにぴったりのビッグ・オーに出会った。その後は？
	高垣忠一郎文、山田喜代春版画『自己肯定感って、なんやろ?』かもがわ出版、2008年 ステキな版画、そして文章、このマッチングはあなたにほんのチョット力を与えてくれるかもしれない。やがて大きな・・・
八巻正治	糸賀一雄『福祉の思想』日本放送出版協会、1968年 深い思索と実践によって書かれた本書は、福祉支援実践を展開するうえでの名著であると共に、福祉学を学ぶ者にとっての必読書でもあります。
	谷昌恒『教育力の原点』岩波書店、1996年 著者は児童自立支援施設である北海道家庭学校において、優れた福祉支援実践を展開した人物です。厳寒の地での厳しい実践に裏打ちされた文章は、深く静かに読む人の心を揺さぶります。「静かなる情熱の継続」これが谷先生が大切にされた実践のまなざしです。
	佐藤初女『あなたに喜んでもらえるように』海竜社、2010年 本書はカトリック信者であった著書による、深い人間理解に基づいて綴られた珠玉の本です。対人支援の世界で生きる者にとっての必読書です。
山崎裕	Konrad Zacharias Lorenz (K.ローレンツ／日高敏隆訳) King Solomon's Ring『ソロモンの指環(動物行動学入門)』早川書房、1987年 ソロモン王が持つ指輪は、あらゆる生物と会話ができる魔法の指輪。ローレンツ博士は、現代生物学の手法を以って生物と会話し、「刷り込み」現象を解明した。
	Elaine Morgan (エレイン・モーガン／望月弘子訳) The Aquatic Ape『人は海辺で進化したー人類進化の新理論』どうぶつ社、1998年 人類進化説としては異端視されている「アクア説(人類水棲進化説)」を論理的に展開する説得力は圧巻である。
	宮沢賢治／工藤甲人絵『よだかの星』(絵本) 福武書店、絶版 他の作品同様に、自然科学者としての宮沢賢治の「いのち」への優しさが伝わってきます。やはり東北人である工藤甲人が優しく描く生き物の絵も忘れられません。